

NEW Legend～新しい伝説

焼肉定食(仮)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

外の世界、日本に住んでいた早川 聡（はやかわ さとし）
は妖怪の賢者、八雲 紫をオバサン呼びわたりして、隔離された
世界、幻想郷に飛ばされてしまった物語である。

目次

この日新しい伝説が動き出した	1
チート発動	5

この日新しい伝説が動き出した

あるところのある日、静かに伝説が始まろうとしていた。

「ここはどこだ？」

そこは、森、と言うか山であった。

ところで、この男の名は早川　　聡年齢は不明だ。

で、ここはどこかと言うと、読者には言おう。

ここは、「幻想郷」人から妖、神までも、あらゆる者達の居場所であり、存在意義でもある。

で、そんな所にこの男がなぜいるのかというと、それは遡ること半日前。

早川は地元では有名な悪ガキで、毎日のように喧嘩をしていた。

今日は喧嘩帰りに帰路についていた。

「よう、オバサン、そこどいてくんない？」

と、オバサン呼びわりのものは――

「あら、それは私のことかしら」

鬼と言うか妖怪というか、まあそんな顔をした、妖怪の賢者様であった。

まあ、なんだ？賢者様の逆鱗に触れた早川は予想通り、神隠しにあり、連れてこられたわけである。

「アノ・・・クソババアがーっ!!」

と、叫んでみるも、帰ってくるのはやまびこだけであり、人もいなければ動物もいない。

「なんだよもー、どうすれば良いんだＹ〇！」

「くそ、こんな時に誰かいればな」

と、ただ、誰かに助けを求めた次の瞬間。

「どうしましたか？」

「!？」

綺麗な新緑の色をした髪の毛に深緑色の双眸、コスプレのような服、そして整った美しい顔、

どれをとっても、早川のいた所にはいない美少女だった。

「良かった、助けてくれ、変な胡散臭い女に飛ばされたんだ、と思う」
「え？変な胡散臭い女？ああ、紫さんですね」

「ゆかり？そんなことよりここはどこ?!」

「ここは幻想郷の妖怪の山ですよ」

「へ？妖怪?」

「この娘は何を言っているんだろうか、と思いつつも。」

「てか、幻想郷?」

「はい、幻想郷です、あなたがいた外の世界から隔離された世界です」

「つまり？何?」

「あなたは帰れないと思います」

「へエア?!」

「私も外の世界の住人でしたし、慣れますよ」

「慣れますよ、じゃなくて家族とかは?!」

「こちらの世界の1秒は向こうよりだいぶ遅いので、もうあなたの知ってる家族は全員墓の中だと思いますよ?」

「嘘だろ?」

「知ってる家族は全員墓の中、つまり逆に戻っても面倒なことになると早川は考えた。」

「じゃあ、村とかまで案内してください」

「ええ、分かりました」

「着きましたよ」

「oh.....」

「そこは、何とも言えない、完全木製の民家があり、柵や、堀で、囲まれていた。」

「本当にここに住みますか?」

「いや、ちよつとこれは、もつと気楽に住める場所はないんですか?」

「あるには、あるんですけど、そのの大家さんは怖いですよ?」

「?とりあえず連れていってください」

「じゃあこちらへ」

集落を逸れて、再び森のようなところへ、しかしさつきと違い、人

気が全く無いわけではない、石畳があるからだろうか。

「ここがその気楽に住める場所、博麗神社です」

「え？神社？」

「そ、それでは私は怖いので逃げます」

「え、ちょー！」

「またいつか会いましょう！」

と、そそくさと逃げ去って行った少女であった。

「さて、どうしたものか」

「何時までも鳥居の下にいる訳にはいかないし」

「とりあえず人がいるか確かめてみるか」

と、歩き出した早川の足元に――

グサツ！

「へ？」

足元には何やら怪しげな御札が刺さっていた。

「アンタ、誰？」

前を見るとそこにはやる気のなさそうなまたもや美少女がいた。

「え、早川 聡です」

「ふーん嘘じゃないみたいね、で何のよう？」

「しばらく泊めてもらえないで「無理」ええ？」

「無理よ、面倒臭いし」

「え、でもどこにも行く宛がないんです」

「無理」

「家事とか手伝います」

「・・・無理」

「働きます」

「よし、採用、上がりなさい部屋へ案内するわ」

なんだ？面接でもしてたのか？

「ここがあなたの部屋よ」

畳が9枚だから9畳か？とりあえず広かった。

「あと、隣は私の部屋だから来ないこと」

「覗いたら？」

「殺す」

やる気のなかった少女に殺気が現れたので冗談では無いらしい。

「風呂はあつちで厠はあつちetc」

「で、アンタの仕事は食料調達ね」

「うわ、ハードだな」

「うるさいわね、文句があるなら出ていきなさい」

「文句ありません!」

「よろしい!じゃあ行ってこい!」

全く、人使いの荒い娘だ。

チート発動

NEW Legend 〽新しい伝説〽

さて、食料を探しに来たのは良いが。

「何が食べれるものなんだ?」

「キノコ? やめとこ死ぬ」

「狩り? やった事ねえよ」

「釣り? 道具ねえな」

「どうしたものか」

八方塞がりもいいところだが。

「あーもう、どうしたら良いんだ?!」ドサツと芝生に座り込んだ早川。
「釣り具でもあれば良いのに」

半ば諦めているような声で地面に生えていた草に八つ当たりして
引き抜いた、と、思ったのだが

「なんだこの重さは!?!」

と、ビックリしつつ手元を見ると――

「ああ、なんだよ釣竿かよ……エエ?! ナンデ? ナンデ釣竿!?!」

明らかにあの集落を見たあとではオーバーテクノロジーのルアー
があった。

「へ、へー流石は幻想郷か、すげえなこりゃ

何でも出てくんのかな?」

と、不思議な世界だからこんなこともあるだろうと、独自解釈をし
た早川、しかしこれが自分の能力であると気づくのはしばらく後だっ
た。

「さーて、お次は何を出そうかな? てか、川どこだ?」

すっかりやる気が出てきた早川、しかし少し混乱しているのか、食
料を出せば良いのにその事に気づかないようだ。

「そうだな、じゃあ魚のいっぱいいる池とか出すか」

「えーとさつきは確かこうやって」

さつきと同じように地面に手をつけ、イメージし、手を引き上げる
と、地面に池が出来た、と言うか、出てきたの方が正しいかもしれな

い。

「うつひよー何これスゲー」

と、小学生のように喜ぶ早川。

「魚もめっちゃいるしなんだこれ」

「あ、野菜も出すか!」

白菜から玉ねぎ、大根まで出した。

「じゃ、帰るか」

と、ここで気づく

「あれ?ここどこだっけ」

早川はどうやら道に迷ったようだった。

「いや、こういう時はアレだ」

どうやらまた何かを出すようだ

「じゃあ、VTOL機で」

・・・oh・・・ 早速チートを使い始めた早川、そして、ここに不似合いな垂直離陸の戦闘機が出てきた。

「スゲー航空ショー以外で見たことねえけど意外とでかいな戦闘機つて」

「じゃあ行くか、ちよつとうるさいかもしれないが」

どうやって操作するのか、と思っっているかもしれないが、早川の能力は先ほどの釣り同様、やり方やどのようにしたらいいか、召喚しただけで分かるというチート能力だったのだ。

キイーンツ!!

「ちよ、何何?!うるさいし風も凄いいけど!」

と、困惑する霊夢。

「よつとー!」

と、平然と着陸し降りてきた早川に霊夢は

「ちよつとあなた!何してるの!」

「何って帰ってきたただけだけど?」

「そうじゃなくてあなた!能力者?!」

「は?能力?大丈夫?」

「これどこから持ってきたのよ？その大量の食料も」
「どこって、お前知らないの？」

と、言つて地面に手を当てた早川、そして
「こうやって、こう」

と、平然とスナイパーライフルを取り出した早川。

「え？ちよ！え?!あんた何したの?!」

「はあー、こうやってみ」

手を地面に付けるように霊夢に言う

「うん」

「で、欲しいものを想像して」

「はい」

「で、引く」

「こう？」

「そうしたらほら」

と、手にライフルの弾を手にした早川と、砂を持った霊夢。

「あんた能力者でしょ？」

「は？ここが幻想郷だから出来るんじゃないの？」

「知らないわよ、幻想郷を何でも出来るどころと勘違いしてるみたい
ね、聞いているの？」

と、スナイパーライフルに弾を装填しながら聞いている早川に言っ
た。

「え？ああごめんあんまり聞いてなかった」

「はあー、とため息をつく霊夢と」

「あ、当たった」

パアンと鳥を狙撃した早川だった。